

36) メッケル憩室により閉塞性イレウスをきたした一例

生天目 信之・塚原 明弘
諸田 哲也・大橋 泰博
岡田 貴幸・斉藤 英俊 (水戸済生会総合病院)
山洞 典正 (外科)

【症例】M. S. 61才の男性。主訴は腹痛，57才から慢性膵炎にて follow されていた。現病歴は今年の7月21日突然の腹痛出現持続，翌日イレウスの診断にて内科入院となった。23日にはイレウス管挿入し終末回腸まで進んだところで造影を行い狭窄像を認めたため，当科転科となった。

【画像】入院時腹単では右上腹部に niveau と拡張した小腸を認めた。イレウス管造影では終末回腸で滑らかな狭窄像を認め，CF からの造影では同部位にて肛門側の狭窄像を認めた。CF では Bauhin 弁より約 5 cm の終末回腸ではほぼ完全閉塞を認めたが，粘膜面は intact であった。以上より何らかの索状物によってしめられたイレウスと考え，8月18日手術を行った。開腹すると Bouhin 弁より 60 cm でメッケル憩室が腸間膜と癒着しバンドを形成しておりこの部分で内ヘルニアとなっていた。このためこの狭窄部とメッケル憩室を含めて回盲部切除を行った。

【まとめ】メッケル憩室により閉塞性イレウスを来した1例を経験したため報告した。当疾患は術前に診断されることは希であるが手術歴のない閉塞性，絞扼性イレウスの場合には当疾患も考慮されるべきと思われた。今後は腹腔鏡を含めた minimam surgery も考慮されると思われた。

37) イレウス管造影により発見された小腸悪性リンパ腫の一例

寺島 哲郎・多々 孝
伊賀 芳朗・村山 裕一 (村上総合病院)
清水 春夫 (外科)
原田 武・古川 浩一 (同 内科)

症例は78才男性，平成8年5月下旬よりイレウス症状

があり当院受診，保存的に軽快し注腸，大腸内視鏡検査等施行したが，異常を認めなかった。しかしその後も腹痛や吐気が続き，平成9年7月には下痢と嘔吐が頻回となり7月31日入院，イレウス管を挿入した後軽快した。原因検索のためイレウス管造影を施行したところ，長さ約 4 cm の全周性狭窄を認め，これに一致して体表より可動性良好な硬い索状物を触知した。炎症性あるいは悪性狭窄を疑い開腹した。手術所見では回盲弁より 67 cm の回腸に径 4 cm の腫瘤を認めたため小腸腫瘍を疑い大腸癌の D₂ に準じた切除術を施行した。病理組織学的には，Non-Hodgkin lymphoma, diffuse, large cell type であった。

38) 高齢者大腸穿孔症例の特徴と手術成績

篠川 主・中塚 英樹
藤田みちよ・鰐淵 勉 (南部郷総合病院)
佐藤 巖 (外科)

1980年1月～1997年9月まで当科での大腸穿孔手術例は42例で，年齢は18～90 (65.2 ± 16.3) 歳，男：女=22：20，遊離型：被覆型=27：15，大腸癌：18例，死亡例：12例 (28.6%) だった。また生存例，死亡例の年齢は 61.1 ± 16.3，75.5 ± 11.2 歳で有意差 (P<0.01) を認めた。遊離型では発症から24時間以内の手術例でも19例中5例の死亡を，被覆型では48時間以降の手術例が10例あり，うち4例が死亡したがいずれも高齢者の割合が高かった。また大腸癌18例と医原性穿孔を除く非大腸癌症例18例の年齢は各々 70.4 ± 14.5，60.2 ± 18.0 歳で大腸癌症例が高齢であった (P<0.01)。1980～1995年の当科での70歳以上の腰麻・全麻下悪性疾患手術例のなかでは，大腸癌症例の増加が顕著で，今後高齢化社会では穿孔例を含む大腸癌の治療が重要と考えられた。